

ナイチンゲール・スピリットで行こう。

～成熟社会をつくる看護力～

看護の未来が詰め込まれた 「たかがい恵美子」を読もう

たかがい恵美子日本看護協会常任理事が2月上旬に著書
「ナイチンゲール・スピリットで行こう。～成熟社会をつくる看護力～」を出されました。

この本には、看護の未来が詰めこまれています。

すでに読まれた方もいらっしゃるでしょうが、
「まだ」「これから」という方のために、ほんのサワリを。



ナイチンゲール・スピリットで行こう。
～成熟社会を創る看護力～
太陽出版 定価1300円+税
全国書店で発売中。品切れの場合は、
ご注文ください。

Part I

「生きる力を守る 看護のプロになりたい！」
十五歳の春に決断した少女は、
熱い思いのまま、
大人になった…

右の見出しは「ナイチンゲール・スピリットで行こう。」のカバーにあるキャッチコピーです。第1章から第5章までは、この本のパートIで、幼少のころから日本看護協会の常任理事になるまでの、たかがいさんが語られています。

第一章 ● 看護の遺伝子が目覚めるまで

「三つの十字架」

たかがいさんが看護と出会うまでの「スペシヤルな生育環境」とは？ 障害児から健康優良児に!? 家族や地域の人たちとの交流——たかがいさんの看護の原点が、ここに。



定期健診(1965年)



第二章 ● 看護への思い

「卵からプロへ」

中学校を卒業したたがいさんは、古川女子高校の衛生看護学科に進学します。その理由が「一番早く看護師になれるから」！

そして、短期大学へ進み、つぎは大学へ編入というところで、予想外の(?)不合格…



戴帽式(1979年)



急性期医療からスタート(1983年)

第三章 ● 看護の現場で育つ

「臨床と地域保健」

たかがいさんは、短大の専攻科を修了し保健師の資格を取得して、臨床の現場へ。そして、保健師の資格を活かし、故郷宮城県で地域保健の仕事に就きます。地域の人たちと触れ合いや家族活動の中から「人生(いのち)」という曲が生まれ、CDがつくられました。



「人生(いのち)」
発表会(1991年)



第四章 ● 看護学を学び直す

「自分磨きの旅へ」

地域保健でフィールドを経験したあと、たかがいさんは「仕事を続けていく上で必要なプロセスとして」東京医科歯科大学へ進学します。大学で看護学を深める一方、エイズコントロール・ケア活動や研究プロジェクトにも参加します。「とにかく今の自分にできることを考え、地道に取り組むという行動が、次の自分の力となっていく」と、たかがいさんは述べています。



中央アフリカ共和国でエイズコントロール・ケア活動を体験(1994年)



第五章 ● いざ 政策作りの場へ

「男社会を歩く」

大学院を経て、東京医科歯科大学の教官になったたがいさんは、厚生省(現厚生労働省)へ出向になります。役所という、臨床とも、教育の場とも違った世界。男社会で、しかも医療職のなかでも看護職は圧倒的少数という環境です。ここで、たかがいさんは、自治体保健師の増員、新しい看護配置などの実現に携わります。



ベルギーブリュッセルのEU本部で(2005年)

ここまでがPart I。看護を、臨床、地域、教育、行政と、様々な立場から見わたしたたがいさんは、今度は職能団体「日本看護協会」というまた違った環境へ。Part IIでは、これまでの経験、思いをもとに、これからたかがいさんが「挑戦」していくようとしていることが述べられます。また、それは看護が目指すべき未来でもあります。

Part II

看護が明るく照らす「成熟社会」へ
たかがい恵美子の挑戦とは

たかがいさんの看護・医療へ向けた提案と「きらっと光る言葉」を、ほんの少し…

日本の急性期医療を見直すべき

・医療機関への収容に偏重してきた日本の医療提供体制を真摯に見直し、そのもの入院加療とは何かを改めて整理すること、10年後20年後の日本、これからの人口構成と国民ニーズにあう安全かつ確実な医療提供体制をしっかりと再編成することが今、急務



日本看護協会常任理事に就任(2008年)

尊厳ある死を迎えることのできる多様な看取りの場を整えていくこと

・もつと地域に開かれた柔軟な利用ができる老人保健施設、必要なときに確実に利用できる訪問診療と訪問看護などを整えること。

・これらのサービスを24時間しっかりとつなぐ機能を置くこと。同時に、それらがつつがなく動くための所定のルールを決め、複数の職種が上手に役割分担しながらチームで動けるようにすること。

・ご本人と家族がどんなサービスを利用しても、自分たちらしい暮らしが分断されないようにすること

看護師が病院と地域を連携する

・看護師が責任を持って退院調整の機能を担うことで、大きな病院のケア担当者と小さな在宅ケア機関とが顔と顔でつながるようになる。

社会保障制度を第一線で支え、医療費増大を抑制する原動力である看護職の底力を知ってほしい

・しかし、看護職の育成の場は厳しい状況にある。看護師不足によって、日本の社会保障は地滑りを起こすことにもなりかねない。その岐路に、日本は立っている。

「清く正しく美しく」ではなく「清く正しく逞しく！」

・診療報酬を知ろう！
・自分たちの技術が、社会サービスとしてどのような名目で、どのように規定され、どのように評価されているのかを、少なくとも熟知しておくべき。
・ご奉仕ではなく、労働の対価としての適正な報酬を

看護外来の拡大を

・継続的な看護ケアを必要とする人に対しての取り組み
・看護師本来の持ち味を存分に発揮しながら効率よく療養を支えていくことができる
・地域に密着した新たな看護サービスの充実につながる

臨床能力を高める場の設立

・資格取得後、一定期間を設けて最低限の臨床能力を身につけることを制度的に整えることが、看護基礎教育改革と併せて必要

もつと自由な就業スタイルへ

・130万人を超える看護の労働力が協力して、子育て世代の窪みを改善しよう。そうすれば結果的に男性の働き方も変化し、社会参加の多様な道が開けるだろう

・子育て世代で窪むのは、「今が引き際」と思い込んでさっさと退職を決める。同じ医療職である女性医師にはこのような現象は見られず、キャリアを生かせる働き方にシフトしていつている
・働く看護職の六割が既婚、八割以上が子育てしている。もう一息！
・「しばらくは半分のパワーで仕事を続けましょう、お互い様なんだから」という同僚の声で支えられる環境をつくっていきよう

現場を科学せよ！

・研究者は実践からの理論化だけでなく、それを制度化するまでの役割を担っている。

「ナイチンゲールスピリットで行こう」に込めた思い

日本看護協会常任理事 たかがい 恵美子

12歳のころに初めて自分の将来を問われて以来、私は「ああ自分は守られている、大丈夫！」と思えるような社会づくりに貢献したい、という願いに突き動かされてきたように思います。

それを実現するのが、看護の仕事です。当初は自分でも、いつ道を逸れることやらというぐらい弱腰でした。しかし、今は、幼な心に思い描いた理想に対して、自分がどこまで挑戦し続けられるのか、とことんやり遂げてみよう、という気持ちになっています。

それは、看護の仕事をとおして「いくつになっても成長できるのだ」ということや「みんなが、いろんなところで踏ん張っている！一人ではないのだ」ということを体験し、それを繰り返し実感することができているからだと思います。そしてこれからは、もっと上手に私たちが看護職の知恵と経験を使える社会づくりを進めたい。

この醍醐味と止めどなく深まっていく人間への興味、あるいは信頼感、そうしたものを、自らの小さな歴史を振り返ることで、多くの方に感じていただきたいと思いました。

本書のなかでは、看護の先輩、看護の仲間、そして次代を担う子供たちへ、こうして得た心の財産が、私にとって何よりの誇りなのだと思えたかったです。それは、一人ひとりの内なる声、思いやりの心に自信を持ってほしいからです。また、これからの社会を支えるのは看護の心なのだということを、看護職以外の方々にもお伝えすべき時を迎えているからです。

また、私と同年代の方々に、思春期のお子さんと将来のことを語るのには気恥ずかしいと思われる方。この本をさりげなく卓袱台にでも置くことで、こんな生き方もあるよと、自信を持って生き

てごらん、というメッセージを送れるかな、と。そんなお役の立ち方も、大変うれしいです。

どんな状況下であれ、お互いがお互いを支えにして社会が成り立っているのですから、自分らしく生きることができるよう努力することが大事。これからは、そうした信頼に裏打ちされた人間的なつながりと一人ひとりの責任ある行動こそが必要。そんな当たり前のことを、身近なところで語り合う材料として活用いただければ幸いです。

そして一人でも多く、看護サポーターが増えていくことを期待しています。



ホームページ「たかがい恵美子のめざせ、看護維新」で活動報告と情報発信を行っている

看護師はオーナーであれ

・看護職は「看護技術という付加価値を持つ一つのブランド集団」
・オーナーになるという感覚がないゆえ、自分の仕事をお金に換算するという発想も希薄

・看護職は社会保障の担い手であるという自覚と、その責務をまっとうするためにはお金がかかるという事実を認識すること

・自分の技術がどう評価され、評価を高めるにはどう展開していかなければいけないのかを、第一線の現場から日々学び取り、実践すること

・より高い水準の看護技術を社会に還元していく立場にあること

「前向き3K」への発想転換

・看護師不足が深刻とされた頃に言われた「きつい、きたない、きびしい」から「賢く、健康的で、確実に仕事する」の「前向き3K」への転換
・楽に、美しく、簡単にできる仕事なんて世の中にはない。それが現実社会の姿。プラス思考で物事を処理していこう。

まだまだ、きらきら輝くフレーズがありますが、それは実際に本を手にとって、ご自分で探してください。



高階 恵美子
(たかがい 恵美子)

日本看護協会常任理事

1963年宮城県生まれ。

1984年埼玉県立衛生短期大学卒業、1985年埼玉県立衛生短期大学専攻科修了、1989年国立公衆衛生院専攻課程修業、1993年東京医科歯科大学医学部保健衛生学科卒業、1995年東京医科歯科大学大学院医学系研究科博士課程前期修了、1996年WHOエイズコントロールケア研修修了、1997年東京医科歯科大学大学院医学系研究科博士課程後期中退。

社会保険埼玉中央病院、宮城県大崎保健所岩山支所、宮城県総合福祉センター精神保健部勤務を経て、1997年4月から東京医科歯科大学医学部で文教教官(地域看護学)。2000年8月厚生労働省(旧厚生省)へ向出し、厚生労働技官となる。健康局をはじめ様々な部署を歴任し、2005年保険局医療課課長補佐。2008年3月に厚生労働省を退職。2008年6月日本看護協会常任理事に就任し、訪問看護・介護保険・医療保険などを担当。